

1980

蛇塚B

長野県佐久市新子田蛇塚B遺跡発掘調査報告書

昭和55年3月

長野県佐久市教育委員会

序 文

佐久市教育委員会

教育長 浅沼 謙

蛇塚B遺跡の発堀調査を終えて

佐久市大字新子田字野馬久保地籍に存在する蛇塚B遺跡については県営住宅の建設地と見立てられこれに先立って調査を委託されたものである。

既に新子田地籍では、9年前に戸坂遺跡の調査が土地改良を契機として当時ご健在の竹内恒先生を団長として市教委で調査を行い概報に纏められている。報告書として確かに究明に至らずして先生の断志となり残念至極であった。しかし、検出されたものは窯址と推定されるものやおびただしい土師器や須恵器群であった。前回調査当時は畑地帯として根深い根菜類が作付けられ深耕されており、耕作者からの土器発見の報で調査したものであった。

今回の蛇塚B遺跡の時代推定は平安時代と判断づけられた。調査團については調査期間が昭和54年10月から11月にかけてであり芝宮遺跡調査と同時であったのでその間の連携を十分に考えて、調査態勢や労力配分に意を用いた。調査にも蘊蓄の深い皆さんなので心得もよく合理的な手順で双方の調査も滞りなく進行をみることができ安堵した次第である。戸坂遺跡にみた一連の遺構や出土物に共通性を見出すことができたが鮮明については専門的な調査團の判断に俟つことでありその結果が期待される訳である。地層も火山灰土の脆弱な土質で風化していく一見調査進捗には容易のようであるが、かえって原状の保存が壊れ易く苦心するところであった。検出遺構は平安時代住居址が5棟と溝1基、土壙2基であった。出土遺物は平安時代の甕・壺等である。

調査團の心情はあくまでも予算や労力にかかわりなく希うことはそこに破壊されるものが一拘もないことなのである。それは或意味では失望につながることかも知れないが好奇やもの珍しさをもってトレンチやグリッドの設定を決してしているものではない。まさに祈る気持で破壊されるものがなく、またあっても無事地下に現存される条件が保たれることを期待しているものである。

いつも乍ら調査員の方々のご努力、ご協力に心から感謝申しあげてごあいさつといたします。

昭和55年3月

例　　言

1. 本書は、昭和54年10月17日～同年11月16日までにわたって発掘調査された、長野県佐久市大字新子田字野馬久保に所在する蛇塚B遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、長野県企業局の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、藤沢平治を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員とし、地元伊勢林、安原、瀬戸、岩村田、桜井地区の方々の協力を得て実施した。
4. 本書に挿入した造構、遺物の実測図は調査員全員があたりトレスは岩間まさいが行なった。
5. 本書に掲載した写真は、高村博文、林幸彦が撮影したものを使用した。
6. 本書の編集は、林幸彦が行ない、藤沢平治が校閲した。
7. 本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたっては、長野県文化課課長指導主事には調査に関し適切な御指導をいただき長野県企業局には、御理解・御協力をいたいた。記して厚く御礼を申しあげる。

凡　　例

1. 各造構の略号は次の通りである。住居址—H、土壤—D、溝状造構—M。
2. 住居址実測図の縮尺は $\frac{1}{100}$ 、土壤実測図は $\frac{1}{100}$ 、溝状造構実測図は $\frac{1}{100}$ である。
3. 出土遺物実測図の縮尺は、土器、石器等すべて $\frac{1}{10}$ である。
4. 土器実測図において、点のスクリーントーンは内黒土師器を、他は灰細陶器を表わす。
5. 土器実測図において、中心線の実線は完全実測を、一点鎖線は回転実測を示す。
6. 図版中遺物の縮尺は、すべて約 $\frac{1}{10}$ である。
7. 図版中では土器番号を簡略した。例えば、第10図1は10—1と表わす。
8. 水糸レベルは標高を記した。
9. 石器の実測については、第三角法を用いた。

本文目次

序 文

例 言

凡 例

本文目次

付表目次

挿図目次

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機..... 1

2 発掘調査の概要..... 2

3 発掘調査日誌..... 2

II 遺跡の位置と環境..... 4

III 層 序..... 7

IV 造構と遺物..... 8

1 H 1 号住居址..... 8

2 H 2 号住居址..... 9

3 H 3 号住居址..... 11

4 H 4 号住居址..... 12

5 H 5 号住居址..... 13

6 D 1・2 号土壙..... 16

7 M 1・溝状造構..... 16

8 グリッド出土及び表採遺物について..... 16

V 総 括..... 17

引用参考文献..... 20

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表..... 6 第3表 H 5 号住居址出土土器一覧表..... 13

挿 図 目 次

第1図 蛇塚B遺跡の位置.....	1	第10図 H 3号住居址出土遺物実測図.....	11
第2図 蛇塚B遺跡地形・周辺遺跡分布図.....	5	第11図 H 4号住居址実測図.....	12
第3図 蛇塚B遺跡A地区層序模式図.....	7	第12図 H 4号住居址出土遺物実測図.....	13
第4図 蛇塚B遺跡B地区層序模式図.....	7	第13図 H 5号住居址実測図.....	14
第5図 H 1号住居址実測図.....	8	第14図 H 5号住居址出土遺物実測図.....	15
第6図 H 1号住居址出土遺物実測図.....	9	第15図 D 1・2号土壤実測図.....	16
第7図 H 2号住居址実測図.....	9	第16図 M 1号溝状遺構実測図.....	16
第8図 H 2号住居址出土遺物実測図.....	10	第17図 グリッド出土・表探遺物実測図.....	16
第9図 H 3号住居址実測図.....	11	第18図 蛇塚B遺跡遺構全体図.....	17

図 版 目 次

図版一	1 蛇塚B遺跡の立地（左端の台地がA地区、右端がB地区。南西方より）	
	2 蛇塚B遺跡近景（A地区、東方より）	
図版二	1 蛇塚B遺跡近景（A地区、西方より）	2 蛇塚B遺跡遺構全景（北方より）
図版三	1 蛇塚B遺跡遺構全景（北方より）	2 蛇塚B遺跡C・Dトレンチ（西方より）
図版四	1 H 1号住居址全景（東方より）	2 H 1号住居址ロームマンドを有す貯蔵穴
図版五	1 H 1号住居址カマド（北西方より）	2 H 2号住居址全景（南方より）
図版六	1 H 2号住居址遺物出土状態（東方より）	2 H 3号住居プラン確認（西方より）
図版七	1 H 3号住居址全景（北方より）	2 H 4号住居址全景（東方より）
図版八	1 H 5号住居址全景（東方より）	2 H 5号住居址遺物出土状態（西方より）
図版九	1 H 5号住居址遺物出土状態（カマド西側、西方より）	2 M 1号溝状遺構全景（東方より）
	3 D 1・2号土壤全景（南方より）	
図版十	H 1・2・4号住居址出土遺物	
図版十一	H 5号住居址出土遺物	
図版十二	1 H 5号住居址・グリッド出土・表探遺物	2 蛇塚B遺跡出土鉄器

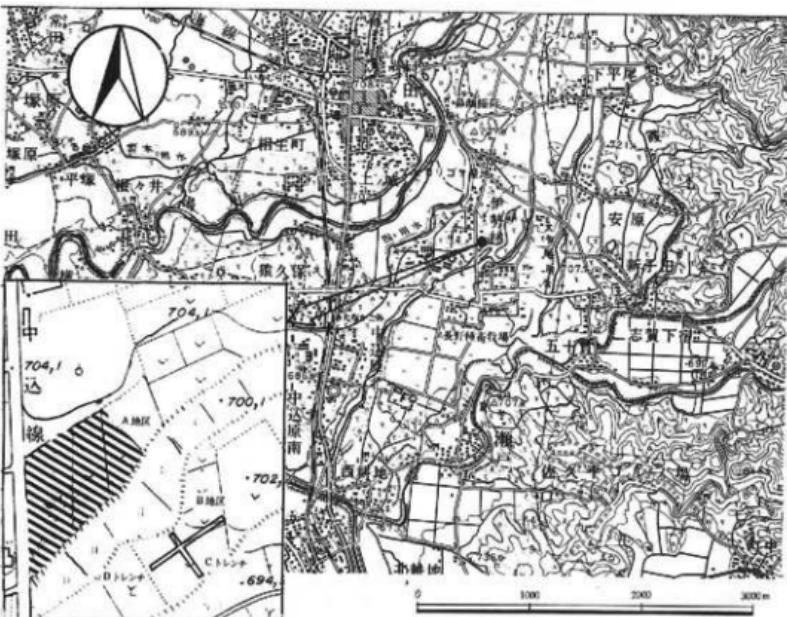
I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

蛇塚B遺跡は、佐久市大字新子田字野馬久保に所在する。近接して蛇塚古墳、蛇塚A遺跡、和田上遺跡がある。

本遺跡は、昭和54年度長野県営住宅団地造成の工事に伴ない、破壊を余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存を要するに至った。

佐久市教育委員会は、発掘担当者に藤沢平治氏を依頼し、佐久考古学会有志の協力を得て、10月17日より発掘調査を実施する運びとなった。
(事務局)



第1回 蛇塚B遺跡の位置

2 発掘調査の概要

- ・遺跡名 蛇塚B遺跡
- ・所在地 長野県佐久市大字新子田字野馬久保
- ・発掘期間 昭和54年10月17日～同年11月16日
- ・調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

浅 沼 育	佐久市教育委員会教育長
市川弥四郎	タ 教育次長
臼 田 幸 作	タ 社会教育課長
塙 田 孝 篤	タ 社会教育係長
堀 内 美 喜 男	タ 社会教育係
高 村 博 文	タ 社会教育係

- ・調査団の構成は下記の通りである。

団 長 藤沢 平治（調査担当者）

調査員 林 幸彦（主任）、井出正義、井上行雄、大井今朝太、工藤かよ子、黒岩忠男、

小山岳夫、佐藤 敏、島田恵子、白倉盛男、羽毛田伸博、三石延雄、武藤 金、

森泉定勝

協力者 岩間まさい、臼田靖子、遠藤しづか、荻原勇市、金森治代、小林順子、関口光雄、
中沢はつえ、中沢ますえ、中沢光子、中沢恭子、並木ことみ、丸山勝子

3 発掘調査日誌

○10月8日（月） 晴	草刈り、グリッド設定
調査団を結成し打ち合せ会（佐久市役所）	○10月24日（水） 晴
○10月17日（水） 晴 枯れ葉等の除去作業	Aトレーナー掘り下げ、長イモの搅乱溝が、東西に走る。
○10月18・19日（木・金） 雨のため作業中止	○10月25日（木） 晴
○10月20・21日（土・日） 休み	Bトレーナー掘り下げ、いー4 グリッド掘り下げ。
○10月22日（月） 草刈り	○10月26日（金） 晴 あー1、えー4 グリッド掘り下げ。
○10月23日（火）	○10月27日（土） 晴 あー3、4、5、いー4、うー3 グリッド掘

- り下げ。
- 10月28日（日） 晴
休日
- 10月29日（月） 晴
きー6、きー5、かー5、かー6 グリッド
掘り下げ。
- 10月30日（火） 晴
おー6・7、えー6 グリッド掘り下げ
- 10月31日（水） 晴
あー7、いー3・6、おー3・5、かー3
・4・7~9 グリッド掘り下げ溝状造構（M
1）
- 11月1日（木） 晴
う・えー4~6 グリッドより検出された落
ち込みをH 1号住居址と命名する。本日より
覆土を掘り下げ始める。あ~かー3・4 グリ
ッドからは溝状造構が検出される（M 2）。
くー4~6、きー4・7、かー4 グリッド、
えー7~11 グリッドを掘り下げる。長イモの
擾乱溝がこの地区にも存在し、深いところは
60cmを測る。
- 11月2日（金） 晴
きー9、かー10、えー8・9、うー8~10
いー9、いーえー11 グリッド掘り下げ
H 1号住居址掘り下げ続行、土層図実測を
行う。えー8・9、うー8~10より検出造構
(H 2)。
- 11月3日（土） 晴
休日
- 11月4日（日） 晴
休日
- 11月5日（月） 晴
く・けー11、い・う・く・けー12、い・う・
く・けー13、い・うー14 グリッド掘り下げ。
H 1号住居址掘り下げ続行。カマドは南東コ
ーナーにより検出される。
- 11月6日（火） 晴
えー14~18、おー12~18、かー11、きー11~
13 グリッド掘り下げ、きーけー11~13 グリッド
より H 3号住居址を検出する。
H 2号住居址掘り下げ開始。
- H 1号住居址掘り下げ続行。
- 11月7日（水） 晴
しー6~8、すー7、こー10、けー9、くー
10 グリッド掘り下げ。
H 1号住居址床面精査後、写真撮影及び平面
図作成。H 1号住居址直下には別の造構が存
在する。H 5号住居址と命名する。掘り下げを開
始する。
- H 2号住居址掘り下げ続行。
- H 3号住居址掘り下げ開始。
- 11月8日（木） 晴
さー6~8・11・13・14、くー12、こー12 グ
リッド掘り下げる。さー6~8、しー6~8、
グリッドより落ち込みを検出。H 4号住居址と
命名。
- H 2号住居址、H 3号住居址掘り下げ続行。
- 11月9日（金） 晴
か~こー14、か・く・さー18 グリッド、H 2
号住居址セクション実測。床面精査。H 3号住
居址セクション実測及び覆土掘り下げ、H 4号
住居址覆土掘り下げ。

- 11月10日（土） 晴
か～すー15グリッド掘り下げ、M 1号溝状遺構掘り下げ、H 2号住居址平面図実測及び写真撮影。H 3号住居址床面精査しピット掘り下げる。H 4号住居址セクション実測、床面精査しピット掘り下げる。
- どの住居址も一様に長イモの擾乱構によつて壊されているため、カマドは遺存状態はよくない。H 5号住居址遺物出土状態撮影。
- 11月11日（日） 晴
休日
- 11月12日（月） 晴
あ～えー10、あ～うー16～18掘り下げ。D 1・2号土壌を検出する。H 3号住居址のピットセクション実測。H 4号住居址平面図作成及び写真撮影。H 5号住居址ピット掘り下げ後、平面図作成及び写真撮影。
- 11月13日（火） 晴
お～すー17グリッド掘り下げ。D 1・2号土壌平面図作成及び写真撮影。
- 11月14日（水） 晴
全体図作成。「田切り」の南側の台地上にC・Dトレンチを設定し、掘り下げに入る。
- 11月15日（木） 晴
C・Dトレンチ掘り下げ及びセクション実測。
- 11月16日（金） 晴
C・Dトレンチ実測後、全体写真撮影。
本日をもつて発掘作業を終了する。
器材撤収。
- 昭和55年1月4日～31日
遺物洗い及び註記、復元作業、遺物実測及びトレス。遺構図面修正及びトレス。
- 昭和55年2月
原稿執筆及び割付け。
- 昭和55年3月
総編集、刊行。

II 遺跡の位置と環境

蛇塚B遺跡は、佐久平の東端、佐久市大字新子田字野馬久保に所在し、標高は702～704mを測る。佐久平は大きく高位の北部平坦地と低位の南部平坦地とに分けられる。低位は、千曲川を主とする河川の沖積平坦地といえ、高位は浅間山の噴出物に覆られた南方に緩く傾斜する平坦地である。両者の境はおむね滑津川と千曲川合流点附近にあり、後者の南東端に本遺跡は位置している。この高位の平坦地は、湯川・濁川等の大小河川によって浸蝕された断崖と平坦面の谷底とをもつた田切り地形が随所にみられる。多くの遺跡はこの谷に面した台地縁辺上に分布している。本遺跡の東、南側にも南北に数条の田切り地形が形成されている。

今回調査の及んだ範囲は、蛇塚B遺跡全体の南端部にあたる。近接する遺跡としてまず約1km南東の戸坂遺跡があり、昭和46年4月に一部が調査されている。弥生時代後期の住居址1棟、平



第2図 地形及び周辺遺跡分布図

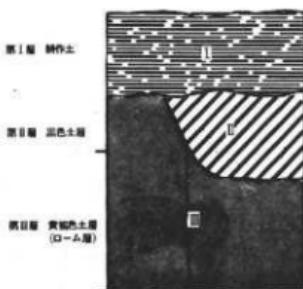
安時代住居址4棟が検出されている。さらに、南方約1kmには和田上遺跡、和田上南遺跡、和田遺跡がある。和田上南遺跡は昭和54年9月に調査され、弥生時代中期住居址5棟、平安時代住居址2棟他が検出された。また、本遺跡の北方には上小平遺跡、蛇塚A遺跡、蛇塚古墳等が湯川に面して存在する。

これらの遺跡で特異なのは、まず明治年間に坪井正五郎氏が探査をされた和田上遺跡であろう。約4haの広範囲に縄文時代中・後期、弥生時代中・後期、古墳時代、平安時代の各時代の遺物が濃密に分布している。縄文時代の遺跡は、標高700m内外の市内千曲川東岸には数は少ない。しかも和田上遺跡の場合は表掲される遺物の量には驚くべきものがある。すぐ下位の段丘には和田遺跡があり耕作者によれば敷石住居址の存在する可能性もある。また、弥生時代の中頃の資料もこの地域に多く出土しており、下平尾方面からの比較的穏かな小河川と生産面との関連も注目されよう。さらに平安時代に至っては、戸坂遺跡の報文中にも特筆されているようにK1号址の存在は、この地域の土器生産面で留意されるべきものである。
(林 幸彦)

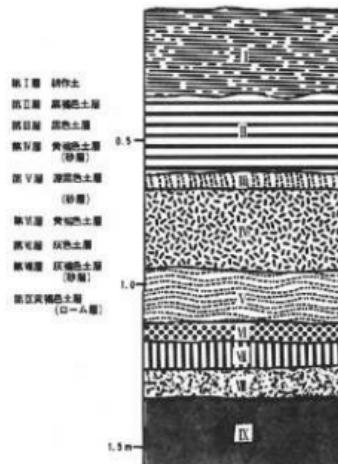
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺 跡	所 在 地	立 地	時 代				備 考
				縄	弥	古	歷	
1	蛇 塚 B	糸子田野馬鹿他	台 地				○	
2	蛇 塚 A	* 蛇塚他	*				○	
3	蛇 塚 古 墳	* 蛇塚	*			○		
4	核 敷	* 核敷	*			○		
5	核 敷 古 墳	* 核敷	*			○		
6	上 小 平	岩村田上小正	*			○		
7	大 井 城 路	* 宇古城	*			○	昭和54年一部発掘、長野県史跡	
8	上 の 城	* 上の城他	*			○	○ ○ 昭和48年発掘調査	
9	鶴 久 保	安原鶴久保	*			○		
10	上 屋 谷	* 上屋谷	*			○		
11	酒 の 前	酒の前	*	○		○		
12	獲 宅	* 獲 宅	*			○		
13	城 の 前	城前394	*			○	○	
14	安原大塚古墳	* 城前394	平 地			○	長野県史跡	
15	宿 上 屋 敷	* 宿上屋敷	台 地			○		
16	下 屋 谷	糸子田下屋谷	*			○		
17	戸 坂	* 戸坂	*	○	○	○	○	昭和46年発掘
18	四 フ 塚 古 墳	* 四フ塚651	*			○		
19	神 明 の 木	* 神明の木	*		○		○	
20	和 田 上	* 和田上	*	○	○	○	○	
21	和 田	糸子田和田	段 丘	○	○	○		
22	高 薮 沢	* 高 薮 沢	台 地	○				
23	野 馬 塚	猪 久 保 野馬塚	*		○	○	○	
24	平 尾 道	猪 久 保 平 尾 道	*		○	○	○	
25	和 田 上 南	糸子田和田	*		○		○	昭和54年発掘調査
26	酒 観	糸子田深堀	*		○			昭和40年発掘調査
27	西 蔵 地	糸子田西蔵地	段 丘	○	○	○		

III 層序



第3図 蛇塚B遺跡A地区層序模式図



第4図 蛇塚B遺跡B地区層序模式図

本遺跡の調査範囲は、紅雲台台地から続く台地の南端部（A地区）と、田切りを隔てた周囲を田切りに囲まれた中洲状の台地（B地区）に及んだ。A地区を第3図、B地区を第4図に示した。

第3図第I層は耕作土で第III層が混じりバサバサしている。A地区全体に長芋が栽培されていたために、幅10~20cm、深さ50~80cmの溝が0.5m~1mの間隔で東西に走る。第II層は黒色を呈し造構覆土である。第I層に溝状に擾乱されている。第III層は上部がローム化しており、下部にあっては粒子が粗く粘性少い紫色を呈す火山灰土である。造構は第III層上面において確認されたが、この層は非常にもろく造構はくずれ易い。

B地区は、ほぼ全面に旧河川跡が認められた。第III層より第V層までは、旧河川の堆積土であり砂層及び腐蝕土層の互層となっている。台地の中央部が最も深く南北に浅くなる。出土遺物は第II層に最も多いため大部分は磨耗していた。

IV 遺構と遺物

1 H 1号住居址

遺構（第5図、図版4、5の1）

本住居址は、H 5号住居址と完全に重複し、重複部には張り床をして構築している。プランは南北 540cm、東西 540cmで方形を呈し、壁残高は 8~36cm を測る。床面は全体に堅緻である。ピットは 3 個検出された。P₁ はカマド北側で、長軸 84cm、短軸 74cm、深さ 40cm、内部には焼土と灰が堆積していた。P₂ は南西隅にあり住居址内側をロームマウンドが囲むように付随する。P₃ は東

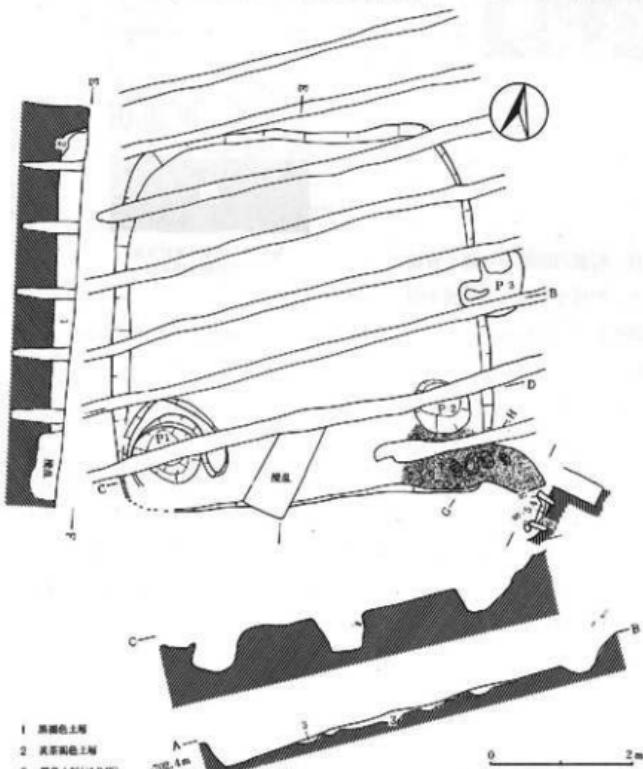
壁中央で、不整形を呈し深さ 18cm を測る。明確な主柱穴は検出されなかつた。

カマドは南東角に構築されているが、袖石と思われる割石と火床付近に焼土及び灰層を留めるのみで耕作の擾乱が著しい。

遺物（第6図、図版10・12）

本住居址出土遺物は少量であった。

図示し得たのは土師器坏形土



第5図 H 1号住居址実測図

器と鉄器及び砥石である。

1は口径8.4cm、器高2.1cm、底径5.2cmを測る。胎土・焼成とも良く中世のかわらけに近いものである。内外面ともロクロ使用のヨコナデ、底部には糸切りが残る。

2は流紋岩の砥石で両面ともよく使いこまれている。3は現存16.7

cmの用途不明鉄器である。これらその他に土師器壺形土器が2個体、1と同様の壺形土器1個体、内面炭素吸着させた壺形土器がある。小片であり不明確ではあるがふいごの羽口と思われるものも1片出土した。須恵器は皆無で、耕作土層より灰釉陶器の壺形土器が1点みられる。1はII区2はカマド内より出土した。

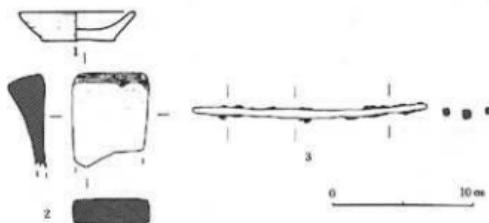
本住居址出土の遺物は少なく、時期的判断資料に乏しいが、1の壺形土器及び全小破片の特徴から国分期に比定される。住居址付属施設のカマドが南東角にあるという事例は佐久地方では少く、H3、H4号住居址と共に特異な存在である。

(森泉 定勝・林 幸彦)

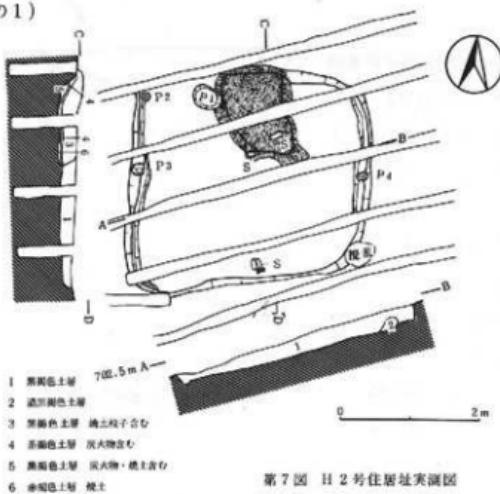
2 H2号住居址

遺構(第7図、図版5の2、6の1)

本住居址は、南北310cm、東西340cm、南壁西側がやや張り出す不整長方形のプランを呈す。壁高は確認面から12~22cmを測る。覆土にはほとんど変化がない。長芋の耕作溝が東西に4条走る。カマドは北壁のはば中央に位置しほとんどが崩壊していた。東側の袖石と厚さ5cmで1m×1.2mの範囲に確認された焼土にその痕跡がうかがえる。ピットは4個検出され、P₁は38cm×28cm、深さ14cmを測り、P₂



第6図 H1号住居址出土遺物実測図



第7図 H2号住居址実測図

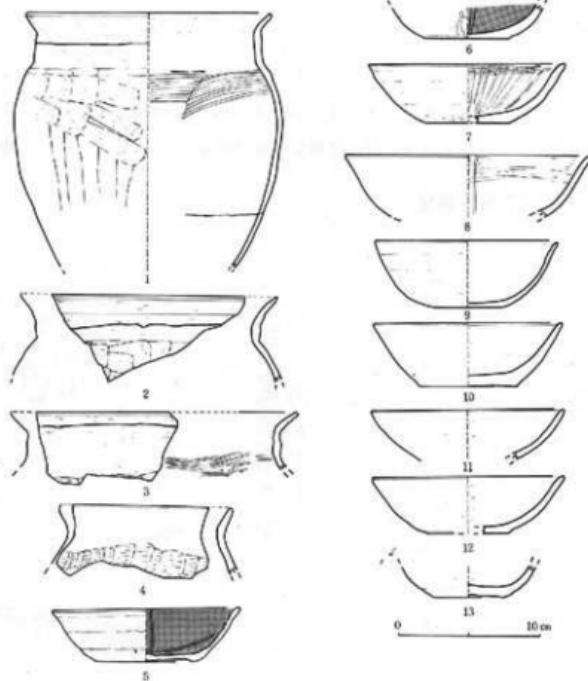
は径16cm、深さ8cm、Bは径20cm、深さ14cm、P₁は16cm×12cm、深さ8cmをそれぞれ計測する。B₂～P₄は柱穴と思われ、B₃とP₄は壁の中に検出された。西側と東側には幅15～20cm、深さ10cmの周溝が巡っている。遺物のほとんどは、カマド西側とカマド前に集中して出土した。

遺物（第8図、図版10）

本住居址の出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器がある。図示したのは、土師器變形土器4点、環形土器7点、須恵器環形土器1点で、その他の小片も須恵器環形土器1個体、灰釉陶器長頸瓶頭部片1点があるだけですべて土師器片であった。

變形土器は4点あり、口辺部が「コ」の字形をなし、口縁部で外傾するものに1～3、口辺部弱く外傾するものに4がある。いづれも胴上部に横のヘラケズリがなされている。1は胴上部に最大径を有し長胴を呈す。2・3も同形であろう。環形土器は内面炭素吸着させたもの（B類）それ以外のもの（A類）とに二大別される。A・B類とも糸切り底であり、法量は平均しており、口径13.2～14.0cm、器高4.1cm～4.8cm、底径5.0cm～6.8cmを計測する。底部からの立ち上りは10を除き弱く内弯する。

本住居址出土の遺物は、土師器が主であり、特に供膳形態の環形土器が多い。須恵器は、環形土器が若干みられる。国分期に比定される。住居施設では、小規模なものを広く使用しようとしたのだろうか。柱穴が壁の中にあることが注目される。



(三石 延雄)

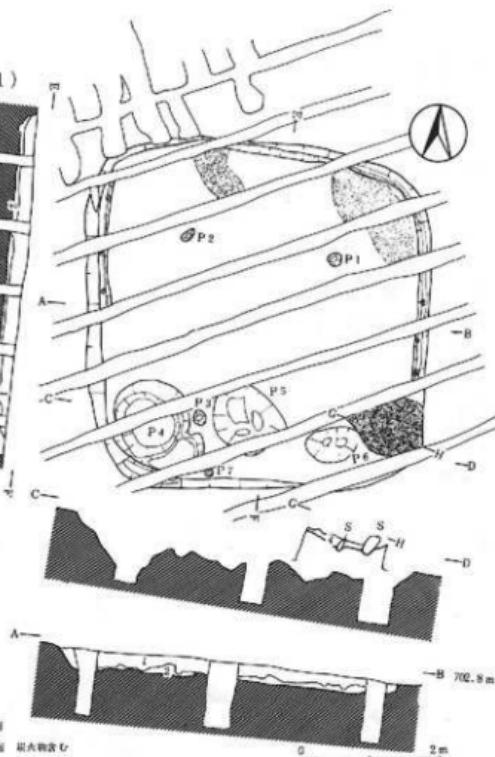
第8図 H2号住居址出土遺物実測図

3 H 3号住居址

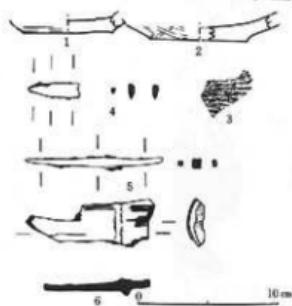
遺構（第9図、図版6の2、7の1）

本住居址は、南北490cm東西485cmを測り隅丸方形を呈す。壁は確認より14~30cmで緩く立ち上る。覆土は3層で形成されるが、7条の擾乱溝が走る。床面は凹凸が激しい。西壁、北壁から東壁に浅い周溝が巡り、周溝内に7本の径10cm程の小規模な柱穴がみられる。

P₁~P₅は主柱穴と思われ径20cm、深さP₁が15cm、P₂が18cm、P₃が12cmを測る。Pは径110cm、深さ30cmを測る。P₄内には多量の炭化材が出土した。P₅は短径90cm、長径100cm、深さ15cmを測り梢円形を呈す。P₆は短径50cm、長径75cmの梢円形を



第9図 H 3号住居址実測図



第10図 H 3号住居址出土遺物実測図

呈す。カマドはH 1号住居址同様南東角に位置し、袖石と灰層にその痕跡をうかがえる。また、本住居址は火災にあったと思われ、焼土の分布が北壁際中央部と北東隅にみられ、P₄などから多量の炭化材が出土している。

遺物（第10図、図版12）

本住居址からは、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器等が出土した。図示できたものは少い。

1・2とも土師器の壺形土器であり、焼成は良い。土師器

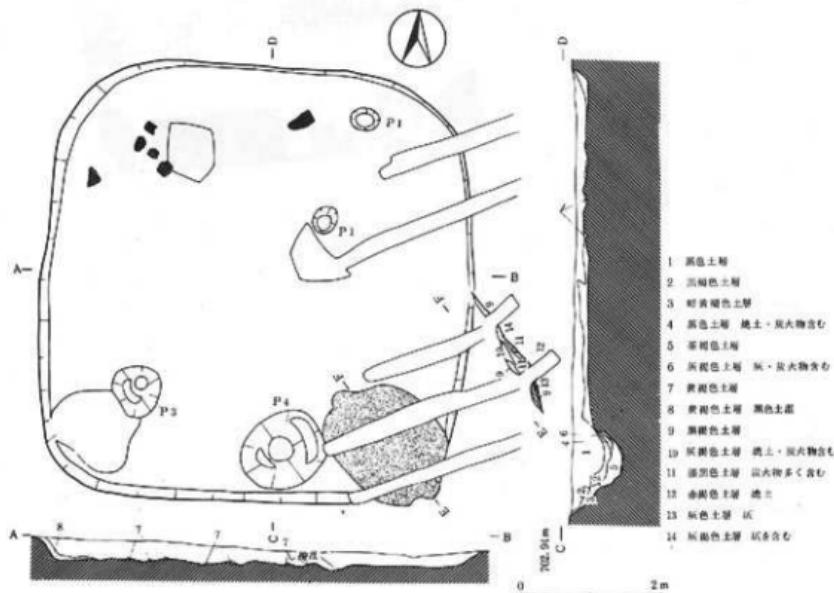
はこの他に小片ではあるが、器肉の薄い變形土器と、1cmを上回る厚い變形土器、内面に炭素吸着させた内面黒色の環形土器（5個体以上）、中世のかわらけに類似する小形の環形土器（5個体）がある。須恵器では變形土器片が4片のみで供膳形態のものはない。灰釉陶器は塊形土器片2片が出土している。鉄器は刀子と思われる4と断面方形のもの5が出土した。6はP4内より出土した炭火材で真竹と思われ茎の直径約7cmを測る。6以外にも2資料出土した。

本住居址の出土遺物は小片だけであるが、主体を占めるのは土師器であり全体に焼成が良く、仕上りは堅密な土器といえよう。中世のかわらけに類似した小形の環形土器が多いのが特徴といえ、須恵器の供膳形態の土器類は皆無である。住居址の付属施設としては、H1号住居址と、南西隅の貯蔵穴、南東隅のカマドという付属施設のあり方に共通性がある。（武藤 金・林 幸彦）

4 H4号住居址

遺構（第11図、図版7の2）

本住居址は南北620cm、東西620cmの隅丸方形プランを呈する。確認面からの壁高は22~36cm、を測り、床面は凹凸が激しく軟弱であった。ピットは4個検出され、P1は長径42cm、短径32cm、

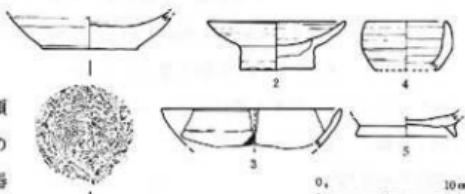


第11図 H4号住居址実測図

深さ20cmの楕円形を呈し、P₂は長径40cm、短径34cm、深さ18cmを測る。P₃は長径72cm、短径65cm、深さは60cmを測る。P₄は長径120cm、短径105cm、深さ46cmを測り、最下層等（第4・5層）に焼土・炭化物が堆積していた。カマドは南東隅にあって、灰・焼土・炭化物層が残っており、痕跡を留めている。

遺物（第12図、図版10・12の2）

本住居址の出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器があり、図示可能なものは第3表に詳述した。土師器は壺形土器がもっとも多くA・B類がある。A類は1～4及び他の小破片の大部分とも、焼成良く仕上りは堅緻で中世のかわらけに類似する。特に2の小形壺形土器は、ベタ底状の高台が付くもののほかかわらけといつてもいいぐらいの形態及び焼成である。内面には油煙状の黒斑がみられる。B類も高台がつくものとつかないものがあり数が多い。3は墨書き土器であるが文字は判読不可能である。須恵器には斐形土器5片、灰釉陶器には長頸瓶片2片があるが少量であった。



第12図 H 4号住居址出土遺物実測図

出土遺物は少量だが、壺形土器の特徴等から本住居址の時期は国分期に比定される。住居施設では、H 1・3号住居址と共に、カマドが南東角に在り、注目される。（井上 行雄・林 幸彦）

第2表 H 4号住居址出土土器一覧表

種類 番号	目 標	法 量	基 形 の 外 形	調 査	備 考
		口 径 mm	最 高 mm	底 径 mm	
12-1 灰	-	(2.7)	5.8	底部赤切り、網目があとがついている。 内外面ともロクロ調整。	色調は淡褐色 I区出土。
12-2 灰	9.8	3.5	5.4	口沿部内面裏地に薄く、厚さは厚い。 供給は浅い。底部はベタ底。	底部赤切り、内外面ロクロ調整。
12-4 灰	(5.8)	3.5	(3.5)	口沿部は直立形状で内部は内側する。 底部は厚い。平底である。	内外面ロクロ調整。
12-3 灰	(12.8)	(2.6)	-	墨書き土器であるが判読不可能。	茶褐色。 II区出土。

5 H 5号住居址

遺構（第13図、図版8・9の1）

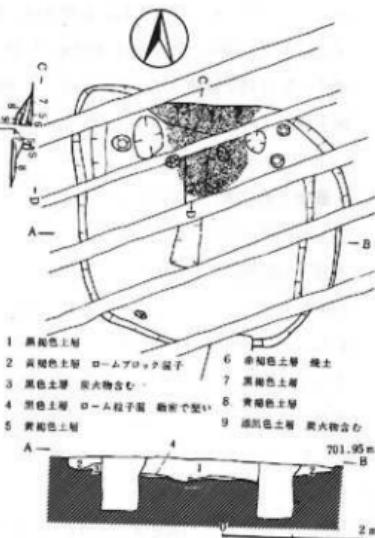
本住居址はH 1号住居址の床面下より完全に重複して検出された。平面プランは南北340cm、東西390cmの不整形を呈す。壁はH 1号住居址床面より5~18cmを計測する。ピットは8個検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は径20~30cm、深さ15~20cmを測る。形態・規模等からP₂・P₃・P₄は、主柱穴と思われる。東側には壁より伸びる床面より10cm程高いテラスがみられる。カマドは北壁の中央に設置されており、火床とおもわれる凹地と焼土及び炭化物層にその痕跡をみることができる。他の住居址と同様に長芋の擾乱溝が床面下にまで及んでいる。

遺物 (第14図、図版11・12の2)

本住居址からは、土師器、須恵器及び鉄器が出土した。主体は土師器が占め須恵器は21の大形變形土器1点である。土師器は煮沸形態と供膳形態の両者が出土している。變形土器には大形のもの1と小形のもの4・5があり、いづれも胴上部よりハラケズリ整形されている。环形土器は14点が図示可能で、A類とB類に二大別される。その他にも破片である個体の別を判別可能なものが、A類10点、B類が32点と多量に出土した。A・B類とも高台を有するものとそうでないものがあり、後者より前者の方が大形の傾向にある。これらは主にカマド付近より出土。

本住居址はH2号住居址に住居形態及び出土遺物等類似している。所産時期は国分期に比定されよう。

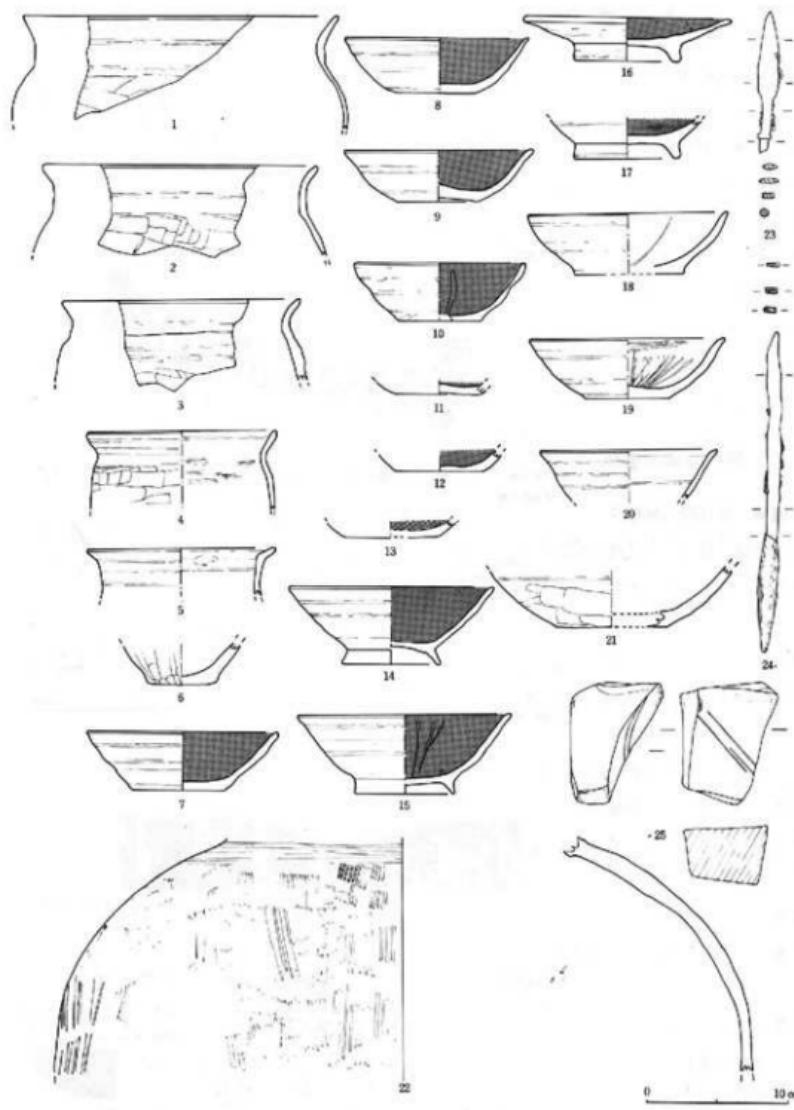
(森泉 定勝・林 幸彦)



第13図 H5号住居址実測図

第3表 H5号住居址出土土器一覧表

番号	形態	法 寸 寸 寸 寸	基 底 底 底 底	基 底 底 底 底	特 徴	形 状
14-1 壺 (25.8)	(7.4)	-	口縁部「コ」字状を呈し、底面に崩壊がある。	内外面口沿部クロロ調整ヨコナデ。外底面上部折れハラケズリ。	変形壺。	
14-2 壺 (18.8)	(6.6)	-	口縁部「コ」字状を呈す。底盤は鉄製。	口沿部クロロ調整ヨコナデ。鉄製底のハラケズリ。	環赤褐色。Ⅲ区底面。	
14-3 壺 (17.9)	(6.4)	-	口縁部崩れ「コ」字状を呈す。底盤は鉄製。	口沿部一辺上部ヨコナデ。軽上部より壊れハラケズリ。	赤褐色。Ⅲ区。	
14-4 壺 (13.6)	(5.5)	-	口縁部崩れ外傾する。底盤は口付。	口沿部ヨコナデ。軽上部のハラケズリ。	変形壺。 内底スリ付各。Ⅲ区。	
14-5 壺 (13.6)	(5.5)	-	口縁部崩れくつく。	口沿部内外面ともヨコナデ。	変形壺。 外底スリ付各。Ⅰ区。	
14-7 瓶 (13.6)	4.2	6.5	口縁部外傾する。	内底赤褐色。底部あ切りクロ口底。	青褐色。 Ⅲ区。	
14-8 瓶 (13.5)	4.0	5.8	口縁部外傾し、口縁部ごく僅かに外傾する。	内底赤褐色。底部あ切り。クロ口底。	青褐色。 Ⅲ区底面。	
14-9 瓶 (13.5)	3.8	5.7	口縁部外傾し、口縁部ごく僅かに外傾する。	内底赤褐色。底部あ切り。クロ口底。	青褐色。 Ⅲ区底面。	
14-10 瓶 (12.3)	4.2	6.0	口縁部外傾し、口縁部やや内傾。	内底赤褐色。内底に丁度の絞りガキ。底部あ切り。クロ口底。	青褐色。 Ⅲ区。	
14-11 高台 瓶 (14.6)	5.5	6.4	口縁部外傾しつつやや内傾。 高台は直線的に付す。高台は縫合付。	内底赤褐色。底部あ切り。クロ口底。	青褐色。 Ⅲ区。	
14-12 高台 瓶 (15.4)	5.7	7.0	口縁部は外傾しつつやや内傾。 高台は縫合付。	内底赤褐色。底部あ切り。クロ口底。	淡青褐色。 Ⅲ区。	
14-13 高台 瓶 (14.8)	3.2	(6.6)	口縁部は外傾しつつやや内傾。 高台は縫合付。	内底赤褐色。底部あ切り。クロ口底。	青褐色。 Ⅲ区。	
14-14 瓶 (14.4)	4.4	(7.8)	底部で崩れます。口縁部外傾しつつやや内傾。	内底赤褐色。内底に暗点。底部あ切り。クロ口底。	暗褐色。 Ⅲ区。	
14-15 瓶 (14.9)	4.3	6.0	口縁部外傾しつつ内窪。	外底クロ底。内底ミガキ。底部あ切り。	青褐色。 Ⅲ区底面・カマド。	
14-16 瓶 -	-	-	口縁部で崩れ外傾。	外底クロ底。	灰褐色。 Ⅲ区底面。	
14-17 瓶 -	-	-	口縁部で崩れます。	外底クロ底。内底ミガキ。底部あ切り。	青褐色。 Ⅲ区底面。	



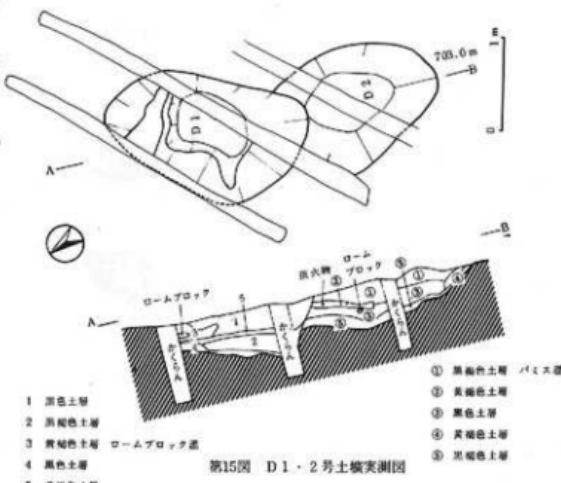
第14图 H5号居住址出土遗物实测图

6 D1・2号土壌

遺構 (第15図、図版9)

D1号土壌はD2号土壌の一部を破壊している。

D1号は長径 220cm、短径 120cm、D2号は長径 約 180cm、短径 130cmを測る不整橢円形を呈す。いづれからも出土遺物がなく、性格及び時期等不明である。

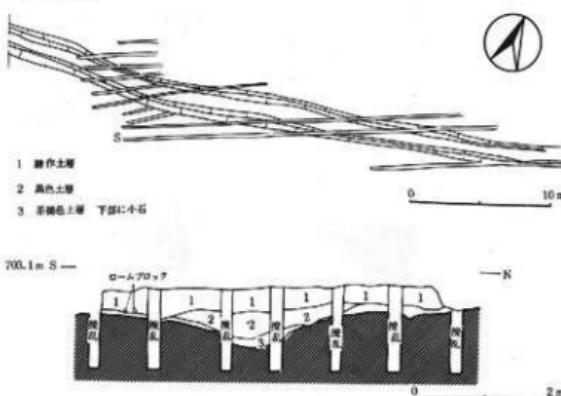


第15図 D1・2号土壌実測図

7 M1号溝状遺構

遺構 (第16図、図版9)

本遺構はH1～3号住居址とH4・5号住居址とを分けるかのように東西に走っている。幅はおむね 250cm、深さは50cmを測るが東方は浅くなる。覆土は1層しか判別できなく、底面には砂層も認められない。出土遺物は極少で時期や性格等は不明。

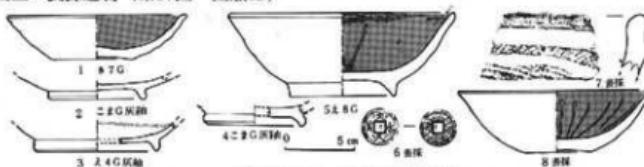


第16図 M1号溝状遺構実測図

8 グリッド出土・表探遺物 (第17図 図版12)

2～4は灰釉

陶器、1・5・8は土師器环形土器である。



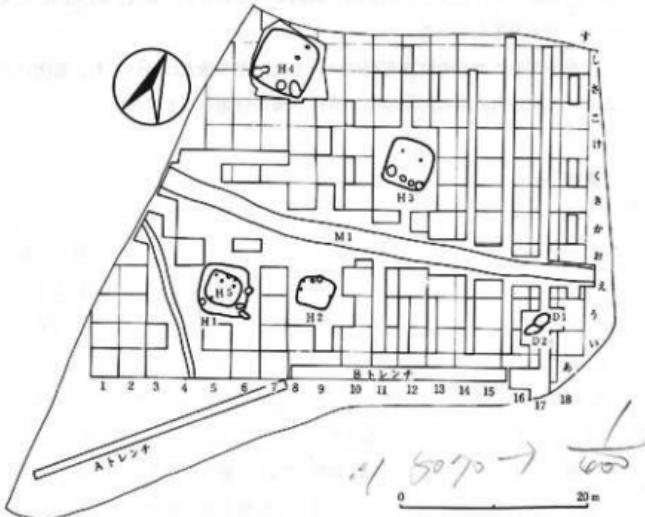
第17図 グリッド出土及び表探遺物

V 総括

蛇塚B遺跡は全体では約5～6haに及ぶ大規模な遺跡である。今回の調査はその南端部にあたり、約3,000m²のうち60グリッドと4トレンチの計800m²についてなされた。その結果、堅穴住居址5棟、土壙2基、溝状造構1基が検出され、土師器・須恵器・鉄器・石器等が出土した。

第4表 蛇塚B遺跡住居址一覧表

遺構	住居址	形 態	規 模		壁 高	カマド	時 期
			南北	東西			
	H 1	方 形	540 ^m	540 ^m	8~36 ^m	南東角	国 分
	H 2	不整長方形	310	340	12~22	北	国 分
	H 3	隅丸方形	490	485	14~30	南東角	国 分
	H 4	隅丸方形	620	620	22~36	南東角	国 分
	H 5	不整方形	340	390	5~18	北	国 分



第18図 蛇塚B遺跡造構全体図

設けている。北壁にカマドをもつ1群をA群、南東角に在る1群をB群とすれば、重複関係や遺物の差異から明らかにB群が後出するものである。柱穴については2群とも明確なものはない。

このB群のようなカマドの位置のあり方は、地域的に特徴があるのか、または、時間的差から生じるものであるのだろうか。佐久市内で国分期に比定される住居址は12遺跡から検出されている。⁽¹⁾近隣の市町村では小諸市開口B遺跡⁽²⁾、望月町犬飼遺跡⁽³⁾、川上村横尾遺跡⁽⁴⁾がある。カマドの設置される位置は、古墳時代にあっては北壁がほぼ一般的であろう。しかし、平安時代になると、上述の各遺跡で東壁あるいは西壁に設けられる例があり、その数も多い。この現象は何に起因するのか。まず時間的な差であるが、すでに長野市浅川西条遺跡の報文中にも指摘されているように、古い時期に北壁が多く東壁等に移動するのは新しい時期に多くなることが佐久地方でもいえそうである。次に地形的及び集落内における住居址群の分布状況からの点であるが、一集落の全容を調査された遺跡がないためはなはだ資料に乏しい。⁽⁵⁾ただ地形的には、兵土山遺跡H1号や、⁽⁶⁾川上村横尾遺跡H1号、後沢遺跡H9号、和田上南遺跡H1号・2号住居址のようにほぼ傾斜面の上方にカマドを設ける例が認められる。⁽⁷⁾⁽⁸⁾平安時代の一集落が調査された好資料として神奈川県上浜田遺跡がある。⁽⁹⁾平安時代住居址78棟のカマドについてその位置の問題点を分析している。それによると、カマドの位置が変化する傾向が平安時代の前期にみられるとはしているものの、カマドの位置の差は必ずしも地形的に制約されておらず、また、時間的にも変化する傾向はつかめなかつたと報告している。

平安時代のカマドの位置変化については、佐久地方においても、要因についてはまだ不明瞭である。住居址内の柱穴の問題等と共に今後の問題点であろう。

遺物

本遺跡からは、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、石器等が出土した。大半は土師器でしかも什器形態の环形土器が占めている。これらの遺物は住居址別のA群とB群とに時期的に二期に分類が可能である。A・B群ともに須恵器の什器形態である环形土器はH2号住居址の2個体を除き小片ずらなく完全に土器組成より消滅している。また、両群の住居址より灰釉陶器が出土している。

土師器の环形土器は量が多くA・B類に分類される。A類は内面黒色研磨されないものをすべて含めた。B類は内面に炭素吸着させたいわゆる内面黒色土器にあたる。A類はさらにA₁類とA₂類に細分することができ、A₂類を調整・胎土・焼成・器形の特徴が中世の土師質土器(カワラケ)に類似するもの(6-1、12-2・3)、A₁類をその他のものとする。A₁・B類とも高台を有す⁽¹⁰⁾ものとそうでないものがあり、前者は後者に比して大きめの傾向にある。

土師器變形土器はH2号住居址及びH5号住居址より多く出土している。大形と小形があるが、器形の特徴から、口辺部が「コ」の字状を呈すものA類(8-1~3、14-1~3)と口辺部が短く外反するものB類(8-4、14-4・5)があり、A類が大形である。A・B類とも調整は

口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリされている。なお、H1・H3・H4号住居址からは、A・B類の他に器厚が1cm強のぶ厚く口唇部が平坦になる土器片がみられ、小片のため器形を断定できないが、おそらく銚釜か鉢状の破片と思われる。

灰釉陶器は住居址出土のもので図示可能なものはなかったが、住居址上部のグリッドより4個体の壺形土器が出土しており(17—4~7) 11世紀中以降に位置付けられよう。住居址出土のものも胎土白色、釉調は白色不透明である。¹¹

このように、本遺跡の出土土器は須恵器の壺形土器が住居址A群に僅かにみられ、住居址B群に至っては消滅し、代って住居址B群ではA₂類の小形壺形土器が数を増す。また、灰釉陶器が両群の住居址から出土している等の特徴より住居址A・B群とも平安時代中期の所産と思われる。ただし、B群についてはA群についてより新しい様相が加っており注目される。

(林 幸彦・藤沢 平治)

- 註1 三塚三塚、三塚鶴田、市道、上桜井北、後沢、僅田、上の城、和田上南、一本柳、戸坂、周防畠A、兵土山遺跡で検出されている。
- 註2 1979年2月に発掘調査されている。
- 註3 森嶋 稔・福島邦男 1978 「大綱遺跡」 望月町教育委員会
- 註4 由井茂也・高村博文 1974 「よこお 南佐久郡川上村横尾遺跡緊急発掘調査略報」 川上村教育委員会
- 註5 矢口忠良・小林 学 1975 「浅川西条 長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落」 長野市教育委員会
- 註6 1979年12月に佐久市教育委員会主体で調査がなされている。
- 註7 1976~1977年に発掘調査されている。
- 註8 1979年に発掘調査が行なわれている。
- 註9 國平健三他 1979年 「上浜田遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告 15」 神奈川県教育委員会
- 註10 このような傾向は三塚鶴田遺跡出土の壺形土器からも看取されている。藤沢平治他 1976年 「三塚鶴田 長野県佐久市三塚鶴田遺跡発掘調査報告書」 佐久市教育委員会
- 註11 笹沢浩氏の御教示による。いづれも折戸53号窯期に比定され東濃系であるという。

引用参考文献

- 大場鶴雄・坂本太郎 1956 「信濃資料 第1巻 上・下」 信濃史料刊行会
- 岡田正彦 1977 「平安時代土師器等の編年試論—特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として—」 信濃 第29巻第9号
- 北佐久郡誌編纂会 1955 「北佐久郡誌 自然篇」
- 國平健三他 1979 「上浜田遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告 15」 神奈川県教育委員会
- 竹内 恒他 1972 「戸坂 長野県佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査概報」 佐久市教育委員会
- 竹内 恒他 1972 「岩村田一本柳 佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報」 佐久市教育委員会
- 福島邦男・森嶋 稔 1978 「犬飼遺跡 第1次・第2次緊急発掘調査報告書」 望月町教育委員会
- 藤沢平治他 1976 「三塚鶴田 長野県佐久市三塚鶴田遺跡発掘調査報告書」 佐久市教育委員会
- 藤沢平治他 1975 「三塚 佐久市三塚遺跡（昭和49年度）緊急発掘調査報告」 佐久市教育委員会
- 藤沢平治・高村博文 1974 「うえのじょう 佐久市岩村田上ノ城遺跡緊急発掘調査概報」 佐久市教育委員会
- 藤沢平治他 1978 「上桜井北 長野県佐久市上桜井北遺跡発掘調査報告書」 佐久市教育委員会
- 藤沢平治他 1976 「市道 長野県佐久市市道遺跡の発掘調査」 佐久市教育委員会
- 森嶋 稔・畠山忠雄・竹内 恒他 1971 「長野県佐久市野沢平僅田遺跡緊急発掘調査報告書」 佐久市教育委員会
- 森嶋 稔・小林 孝・筈沢 浩 「上水内郡誌 歴史編」 上水内郡誌編纂会
- 八幡一郎 1934 「北佐久郡の考古学的調査」 北佐久教育会
- 米山一政・小林 孝・矢口忠良 「浅川西条 一長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落」 長野市教育委員会



1 蛇塚B遺跡の立地（左端の右側がA地区、右端がB地区。南西方向より）



2 蛇塚B遺跡近景（A地区、東方より）



1 犀塚B遺跡近景 (A地区、東方より)



2 犀塚B遺跡遺構全景 (北方より)



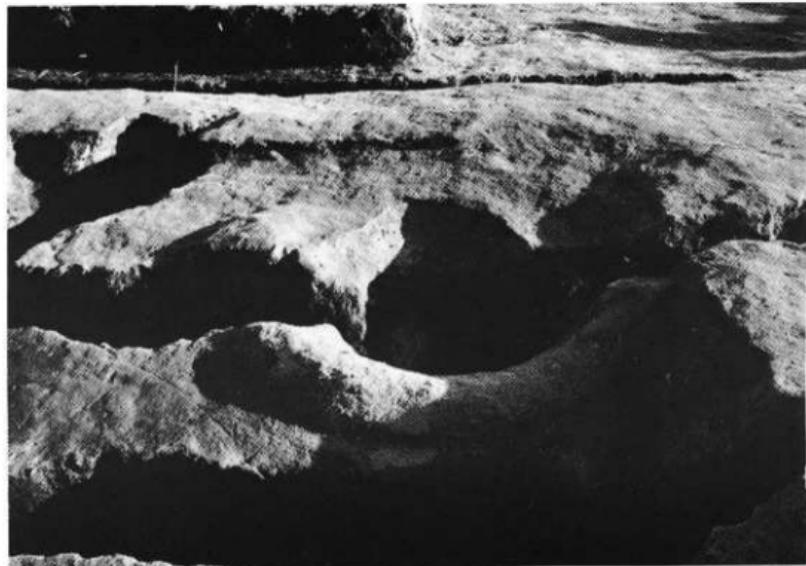
1 蛇塹B遺跡遺構全景（北方より）



2 蛇塹B遺跡C・Dトレンチ（西方より）



1 H 1号住居址全景（東方より）



2 H 1号住居址ロームマンドを有する貯藏穴



1 H 1号住居址カマド（北西面より）



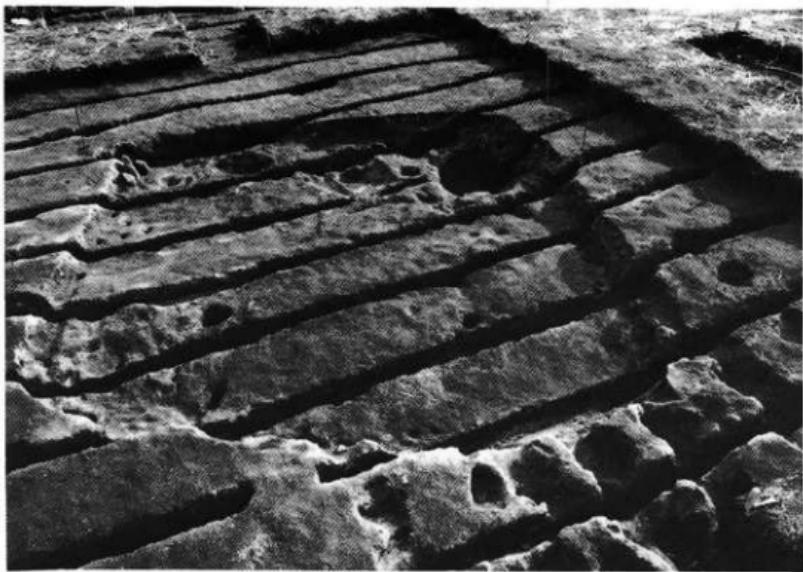
2 H 2号住居址全景（南方より）



1 H 2 号住居址遺物出土状態（東方より）



2 H 3 号住居址プラン確認（西方より）



1 H 3 号住居址全景 (北方より)



2 H 4 号住居址全景 (東方より)



1 H 5 号住居址全景 (東方より)



2 H 5 号住居址遺物出土状態 (西方より)



1 H 5号住居址遺物出土状態（カマ下西側、西方より）



2 M 1号溝状遺構全景（東方より）



3 D 1・2号土壙全景（南方より）

圖版
10



6-1



8-7



H 2 红陶盆



6-2



8-8



8-9



12-7



8-1



8-10



H 4 红陶盆



8-11



8-12



8-13



8-5

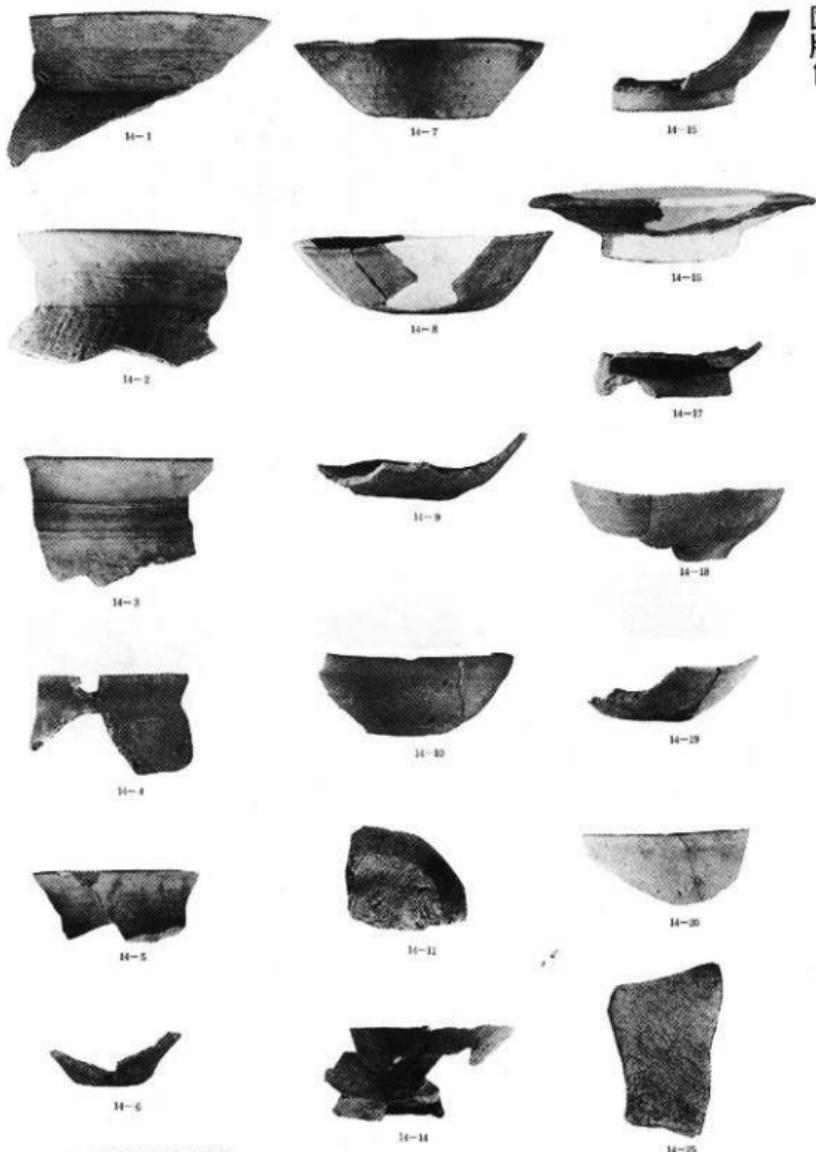


H 2 红陶

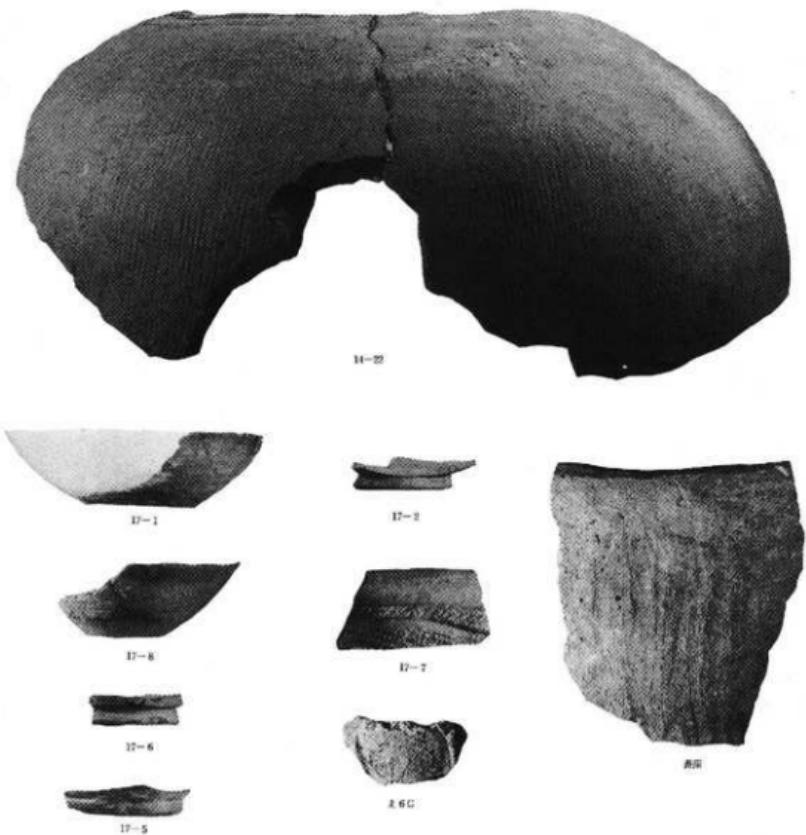


H 4 红陶片

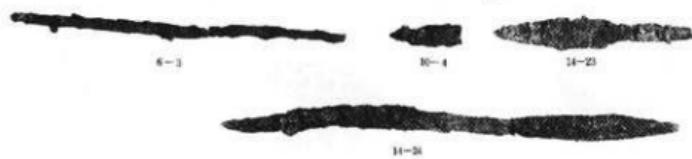
H 1 · 2 · 4 号住居址出土遺物



H 5 号住居址出土遺物



1 H 5号住居址・グリッド出土・表探遺物



2 蛇塚B遺跡出土鉄器

蛇塚B遺跡

長野県佐久市新子田蛇塚B遺跡発掘調査報告書

昭和55年3月発行

編集者 蛇塚B遺跡発掘調査団

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所